

第1章

7つの視点と

12のスポーツキャリアパターン

1. 障害のある人のスポーツ活動のための7つの視点(条件)

本調査プロジェクトで行った100人のインタビューからパラアスリートのスポーツへの社会化(どのようにしてスポーツをするに至ったか)および競技の継続に関して、ある程度共通する以下の7つの視点(条件)を見出すことができた。

1. スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)
2. 障害者スポーツに関する情報を得ている
3. 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある
4. 障害者スポーツを継続するための受け皿がある
5. 継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法が確保されている
6. 競技レベルに応じた社会的支援(家族、職場などの支援)、経済的支援(海外遠征、合宿、用具の購入など)がある
7. 何らかの形(例:ロールモデルの存在、指導者、ライバルの存在、パラリンピックなどの大会、目標となる記録や成績など)で競技に対するモチベーションが維持されている

インタビューに答えていただいた選手の皆さんはいずれもこうした視点(条件)がクリアされている。逆に言えば、これらの視点(条件)が整っていないならば、障害のある人がスポーツにアクセスし、継続することが難しいと言っても過言ではない。

これらの7つの視点(条件)の概略について説明する。

1.1 スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)

第1の視点(条件)は障害のある人がスポーツを始める前提条件といえる。障害のある人がスポーツを実施するためにはまず、スポーツに関心があることが条件といえる。スポーツに関心がなければ次の視点(条件)である障害者スポーツに関する情報を探そうとしないであろうし、情報もたらされたとしてもスポーツへ気持ちが向くこともないと考えられる。また、後天的障害者で受傷前にスポーツにまったく関心がなかった人やス

スポーツ嫌いだった人、が受傷後スポーツにすぐに関心を持つことは何か特別な機会がない限り難しいと考えられる。

障害者スポーツの普及を図るための第 1 の条件として、障害の有無に関係なく多くの子どもたちにスポーツを様々な形で体験させ、好きになってもらうことが必要だと考えられる。そのことで途中で障害を持ったとしてもスポーツに関心を持ってくれるであろうし、先天的に障害があったとしてもスポーツをすることが可能であることを知る人が増え、パラスポーツの普及に結びつくと考えられる。

1.2 障害者スポーツに関する情報を得ている

第 2 の視点(条件)は障害者スポーツに関する情報を必ず得ているということである。情報を自ら主体的に探し求めた人もいれば、何らかの機会に他者やメディアから情報を得たという人もおり、情報源は多様である。障害発生時期や障害種の影響があると考えられる。

情報の取得については選手が生まれた年が影響していることも考えられる。現在であればパラスポーツに関する情報はインターネット等で容易に手に入るが、インターネットが普及する前は情報を得るのは難しかったと考えられる。また、現在はリハビリテーションの保険適用期間が最長でも約 6 か月と制限されていることから日常生活、社会生活への復帰が第一義的な目的であり、その後の趣味や生きがいのためのスポーツ活動に関する情報や体験の機会は少なくなっている。リハビリテーション期間を長く有することができれば、リハビリテーションの最後にスポーツへの導入が図られ、スポーツへと導かれる可能性も高かったと考えられる、ゆえに次の視点(条件)である「障害者スポーツの場へのファーストアクセス」もスムーズに行われたことが推察できる。

1.3 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある

第 3 の視点(条件)は障害者スポーツの場へのファーストアクセスがなされていることである。障害者のスポーツへの社会化では情報が当該者に届いただけではスポーツ活動に結びつかない場合がある。障害者スポーツに関する情報があっても、どこに行けば活動できるのか、どのように

アクセスすればいいのかが分かり、そのアクセス方法が確保されなければスポーツの場には行くことができないからである。また、人によってはスポーツの場へアクセスすることに対する心理的な壁が高く、情報をもっていたとしても現場になかなか足が向かないことがあるかもしれない。さらに、年齢によっては自分でアクセスができないため家族等に頼らなくてはならない場合もある。場合によってはスポーツの場へのファーストアクセスを情報提供者やその関係者が支援してくれるケースや先述のようにリハビリテーションの現場でファーストアクセスが可能なケースもある。

ファーストアクセスの場で多くの人を見るだけではなく、そのスポーツを体験し、面白さを知り、あるいはそこにいる人に勧められたり、勧誘されたりして継続的なスポーツ活動につながる場合が多々ある。まさに「はじめの第一歩」は非常に重要なのである。

1.4 障害者スポーツを継続するための受け皿がある

4つ目の条件は障害者スポーツを継続するための受け皿があるということである。今回インタビューをさせていただいた選手には、全員スポーツ継続のための受け皿があった。多くの場合は当該競技のクラブやチームであった。個人で日常的にゲレンデを訪れ、スノーボードの練習をしている人や、自分で受け皿を作った人もいた。いずれにしても継続的なスポーツ活動の場があった。中にはスポーツ活動の場をいくつか持っており、多くの日を練習に費やしている人もいた。

スポーツ実施の受け皿がないことが障害のある人のスポーツ活動の障壁となっている。希望する競技のチームやクラブが存在しなかったり、諸事情で体育館を利用できなかったりして、近くに利用可能なスポーツ施設がない、あるいは次の視点(条件)で述べるスポーツの場へのアクセスが難しい場合なども、受け皿がないことの要因となる。

1.5 継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法が確保されている

5つ目の視点(条件)は継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法の確保である。スポーツ活動を継続するためにはスポーツの場へのアクセス方法が確保されていなければならない。多くの場合、自分で車を

運転したり、公共交通機関を利用したりしてスポーツの場にアクセスしているが、スポーツの場へのファーストアクセスと同様に、障害の内容や程度、年齢によっては自分でアクセスができないため家族等に頼らなくてはならない場合がある。頸髄損傷や脳性麻痺、筋ジストロフィーなど重度の肢体不自由者の場合、公的な移動支援制度が自治体によっては存在するが、利用目的や回数に制限があるためスポーツの場へのアクセスを家族等が支援している場合がある。18歳未満で運転免許が取得できず、家族も仕事の関係で移動の支援が難しい場合、スポーツ活動が著しく制限され、運転免許取得後に本格的にスポーツを始めるといった例もあった。

1.6 競技レベルに応じた社会的支援(家族、職場などの支援)や経済的支援(海外遠征、合宿、用具の購入など)がある

6つ目の視点(条件)は競技レベルに応じた社会的支援や経済的支援が受けられていることである。スポーツ継続の重要な他者として、スポンサーを挙げた人もいた。パラリンピックに出場するためには世界ランキング上位にいることや国際大会予選を勝ち抜く必要があり、海外遠征や日本代表合宿に頻繁に参加する必要がある。選手雇用の多くの選手は経済面でも、練習時間の面でも会社からの支援を受けている。また、一般雇用の選手でも選手雇用とほぼ同じ条件で勤務している選手、経済的支援はないものの時間的な配慮や、職場仲間の支援がある選手もみられた。一般雇用の場合、海外遠征などは有給休暇や特別休暇を取得し、通常勤務時に人並み以上に働き、職場の理解を得て職場を抜けるような努力をしている選手もいた。

既婚者の場合、スポーツを続けることに対する理解や家族からの精神的な支援やスポーツにお金を使うことへの理解や練習・試合時の移動支援を得ている場合が多い。未婚の場合は父母から同様の支援を受けていることが多い。

1.7 何らかの形(例:ロールモデルの存在、指導者、ライバルの存在、パラリンピックなどの大会、目標となる記録や成績など)で競技に対するモチベーションが維持されている

最後の視点(条件)はモチベーションの維持である。スポーツを継続的に実施するためには、そのためのモチベーションが維持されなければならない。今回インタビューをした100名は様々な形でモチベーションを維持していた。インタビュー調査ではスポーツを継続することにおいて重要な人物は誰かを尋ねている。また、スポーツ継続のロールモデルとなる人を挙げる人もいた。さらに、今後の目標などについて尋ねた。これらの結果から、目標となる人物の存在、指導者、目標とする大会、チームメイトの存在を挙げる人が多かった。6番目の視点(条件)と明確に分けることは難しいが、各選手が何らかの支援や目標(大会や記録)を動機づけとしていることが明らかになった。

2. 12のスポーツキャリアパターンについて

100人の選手のスポーツキャリアパターンは千差万別であり、誰一人として同じキャリアをたどった人はいない。しかしながら、調査結果を積み重ねる中で、障害の発生時期やスポーツを始める時期などにより、図表1-1に示すとおり、おおよそ12のスポーツキャリアパターンがあることが明らかになった。これらはアンケートによる量的調査ではなかなか明らかにしにくい点であり、選手のスポーツキャリアを時系列的にたどるインタビュー調査だからこそ明らかにできたことだといえる。ここではその12のパターンの概要について説明する。

パラスポーツ選手のキャリアパターンは先天的障害者か後天的障害者かによって大きく二つに分かれる(A1~A6とB1~B6)。そして、それぞれはパラスポーツとしてスポーツを始める前に、スポーツ経験がないスポーツキャリアパターン(A1、A2、B1、B2)と、スポーツ経験のあるスポーツキャリアパターン(A3、A4、A5、A6、B3、B4、B5、B6)によってさらに二つに分けられる。次にパラスポーツとしてスポーツを始める前と同じスポーツをパラスポーツとして始めた人(A3、A4、B3、B4)と、違うスポ

ーツをパラスポーツとして始めた人(A5、A6、B5、B6)の二つに分類される。そして最後に、パラスポーツとして始めたスポーツを現在もやっている人(A1、A3、A5、B1、B3、B5)と、現在は違うスポーツを行っている人(A2、A4、A6、B2、B4、B6)に分けることができる。

もちろん、現在数種目のスポーツを同時に実施している人や、現在もパラスポーツの大会と障害のない人のスポーツ大会の両方に出場している人などこのパターンに綺麗に全て納まるわけではないが、おおよそこの12のスポーツキャリアパターンに分類することができる。

図表 1-1 パラスポーツ選手のスポーツキャリアパターン

先天的 障害者	A1		② パラスポーツを始める		現在	A1
	A2		② パラスポーツを始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A2
	A3	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		現在	A3
	A4	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A4
	A5	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める		現在	A5
	A6	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A6
後天的 障害者	B1		② パラスポーツを始める		現在	B1
	B2		② パラスポーツを始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B2
	B3	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		現在	B3
	B4	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B4
	B5	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める		現在	B5
	B6	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B6

A1、A2

A1は先天的に障害があり、いずれかの時点でパラスポーツとしてスポーツを始め、現在もその競技を行っている人である。

A2は先天的に障害があり、いずれかの時点でパラスポーツを始め、その後他のスポーツを行うようになり現在に至っている人である。

A1に該当するのは識別番号 4、11、12、28、40、48、49、54、58、59、61、63、65、68、88、91、94の17名である。

このうち、識別番号 11は先天性脛骨形成不全で3歳の時に両膝下を切断した。子どものころから義足を使っており、友達と遊ぶことはできても体育の授業ではそのことがコンプレックスとなっていた。そのため、小学校・中学校・高校の体育はほとんど参加していなかった。子どものころは、自分が義足を使っているということを周囲に伝えておらず、「脚が

悪い」ということだけを伝えており、皆の前で義足を見せることや外すことは絶対にしなかった。義足であることを悟られないためにも体育に参加しないと自分の中で決めていた。父や兄がスポーツに親しんでおり、自分も何かスポーツに携わりたいと思っている一方で、なかなかチャンスがなかった。高校時代に陸上部のマネージャーとなり、スポーツに携わることができてとても嬉しかったと述べている。専門学校入学後、スキー教室に参加することができず、友人たちと一緒に行けなかったことがとても残念で、「自分も一緒にスキーをしたい」と思うようになった。そのころに知り合いの義肢装具士に相談したところ、チェアスキーを紹介され、取り組むようになり、友人たちとスキーに行くようになった。その後、技術が向上するにつれ、よりチェアスキーが面白くなり、徐々に競技に移行していった。また、友人の紹介でアメリカのチームで練習を行うようになり、現在、現地のアメリカ人コーチに師事している。2001年からスキーを始めて、トリノパラリンピック出場時は仕事と両立しながら競技を行っていたが、その後トップ選手とのタイムが縮まってくる中で、海外で競技に取り組みたい、コーチに専門的な指導を受けたいと考えるようになり、2008年から選手雇用となった。

識別番号 63には先天的な視覚障害がある。高校までスポーツとは無縁だったが、高等部 1 年の終わりごろに、友人の誘いで国立リハビリテーションセンターのゴールボール活動に参加したことがきっかけで競技を始めた。幼児期から小学校低学年までは普通学校に通っていたことから、見えないことで劣等感が強く、目立ちたくないという思いがあり、体育にも消極的でよく見学していた。小学4年生から視覚特別支援学校に転校した。体を動かすというよりは、自分以外にも見えない人がいるということに、すごく救われた感覚があり、見えなくてもこれだけ動けるということで人生に前向きになった。周囲には見えなくてもこれだけ動ける、ということで人生に前向きになった。視覚特別支援学校の寄宿舎で生活していたので、体育館の使用が容易であった。朝食前後での朝練、昼休みも壁に向かって投球などゴールボールの自主練、放課後は部活や国立リハビリテーションセンターで練習、授業以外の全ての空き時間はゴールボールに費やしていた。日本選手権初出場の時から、パワーがあると代表

合宿に声をかけられ、上を目指して世界と戦っていこうと思った。家族が一番のサポーターであり、応援してくれた。何度も手術や、転移と失明の可能性という恐怖の中で育ててくれた両親に感謝している。

なお、視覚障害者の場合、盲学校において7つの条件のうち2、3、4、5が一度に満たされる場合が多々見られた。

識別番号 94 には先天的な聴覚障害がある。1 歳半よりろう学校に通い、ろう学校にいる時は聴覚障害の友達と遊ぶ。地元では遊ぶ人がおらず姉や妹や父と遊んだ。公園に行って遊具や芝生で走ったり、縄跳び、ボール投げ、野球等をして過ごした。幼少時にはシャワーの水がかかるとも苦手なくらい水が嫌いだった。沖縄出身で海が大好きな父親の影響で何度も海を訪れるうちに「泳げるようになりたい」と思うようになり、5 歳のころ近所のスイミングスクールに通い始めた。5 歳の時、地元のスイミングスクールを探した際、3 か所で聴覚障害者は前例がないと断られた。Sスイミングの店長が耳が聞こえない人とダイビングをしたことがあり、「耳の聞こえは関係ないから一緒に頑張りましょう」と言ってくれた。小学部 6 年で初めて出場した日本デフ水泳選手権大会で、デフリンピックの選手に出会い、「大きく鍛えた体がかっこいい」と憧れた。それから「自分も世界を」と夢を描くようになった。

A2に該当するのは識別番号 5、16、44、46、62、66、67、75、78、81、87、89、92、98 の 14 名である。

識別番号 66 には脳性麻痺の障害がある。母親が水泳のインストラクターをしていたこともあり、1 歳半から水泳をやっていた。水の中は浮力もあり、動きやすかった。スイミングは母親が勤めていた場所で、最初は母親と水遊びのようなことから始め、母親がそこを辞めてからは母親の同僚コーチが教えてくれた。一般のスイミングクラブだったので障害のない子どもたちと一緒に参加。泳ぐ時に自分の後に泳ぐ人との距離を空けるなどの配慮をしてくれていた。中学部に上がり、水泳をやめた後に、中学校 1 年の秋から陸上競技を始めた。母親は陸上競技のコーチもしていたので(母親は体育短大を卒業、陸上競技が専門、就職先のスイミングクラブで水泳も教えていた)、地域の小学生から高校生で構成される陸上のクラブチームに入った。地元の総合運動場で活動していた。短距

離(50m)や投てき(ジャベリックスロー)などをしていた。高校 1 年の時(2016 年)、陸上競技大会開催時に人材発掘事業をやっており、そこで初めて自転車を経験した。この時、県障害者スポーツ協会の方が声をかけてくれて体験することができた。自転車には小学校低学年から後ろが二輪の自転車(いわゆるママチャリ)に乗っていた。これで通学もしていたので自転車なら乗れるかと思った。発掘事業で自転車を経験して 2 週間後、県のサイクルスポーツセンターでの体験会に参加した。ナショナルチームの監督やコーチ、トライシクルの選手が自転車の乗り方から、トレーニング方法まで指導してくれた。現在は、2028 年のロサンゼルスパラリンピックに出場したいと考えている。

識別番号 98 は先天性二分脊椎症で下肢に不自由がある状態で生まれた。5 歳の時に、合併症の影響で視力にも障害を負った。小学校・中学校・高校と肢体不自由の特別支援学校で過ごした。スポーツ歴は水泳(1996 年～2001 年)、パラ陸上(1998 年～2009 年)、トライアスロン(2003 年)、パラ・パワーリフティング(2022 年～)である。水泳は東京都障害者総合スポーツセンターが開催する水泳大会に中学・高校と参加していた。

パラ陸上に関しては車いすマラソンから始めたが、視覚障害の影響で競技に難しさを感じ、徐々に距離の短い種目を選択、最終的には 100 m 走に変更した。視覚障害がある中で肢体不自由のクラスで競技を続け、全国障害者スポーツ大会に加えて、ジャパンパラ競技大会、日本パラ陸上競技選手権大会にも出場した。トライアスロンはテレビ局の企画で 4 か月間取り組んだ。パラ・パワーリフティングは全日本パラ・パワーリフティング選手権大会優勝(2 連覇)、国際大会(ワールドカップ、ワールドパラ・パワーリフティングチャンピオンシップ)に出場している。

A3、A4

A3、A4 は先天的に障害があるものの、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人であり、A3 は現在も同じスポーツ(パラスポーツ)をしている人で、A4

はその後違うパラスポーツをするようになり現在に至っている人である。

先天的な障害が比較的軽く、一般の中学校や高校などに進学し、そこで部活動などでスポーツを始め障害のない人とともに試合などに出場していたが、ある時点でパラスポーツとして同じ競技の大会にも出場するようになるというのが典型的である。

A3に該当するのは識別番号13、21、38、45、56、72、76、77、82、84、96、99、100の13名である。

このうち識別番号38には先天的な視覚障害(弱視)がある。すべて普通学校に通っていた。2歳ごろから地元のスイミングスクールで水泳を始め、中学校・高校時代は水泳部に所属し、大学入学後にパラ水泳のクラブでパラ水泳に出会い、現在もそのクラブを活動拠点として競技を継続している。体育に関して、小学校時代は周りの子どもたちとの運動能力の差がそれほどなく、球技の時に少し不自由さを感じる程度で同じように取り組むことができたが、中学校・高校と種目が専門的になるにつれて苦勞するようになっていった。水泳は、親の勧めで始めた。週に2回程度通っており、始めた当初は近所の友達と一緒に通うことが楽しかったが、級が上がるにつれて練習強度が上がり「習わされている」という感覚で、「泳ぐことは好きだけどスイミングの練習は嫌い」という思いを持っていた。中学校・高校と部活動で水泳を続けて、大学入学後は競技から離れて、指導に携わりたいと思い、地元のスポーツ施設で知的障害のある子どもたちのスポーツボランティアをしていた。そこで、大学1年生の秋ごろに、視覚障害のある子どもの保護者から、「視覚障害の水泳でパラリンピックを目指したら」と言われ、視覚障害の水泳は全盲クラスしかないと思っていたが、調べたところ弱視のクラスがあること、また、地元には障害者水泳のクラブがあることを知り、自ら問い合わせたことがパラ水泳との出会いであった。パラ水泳を始めた時と同様に、競技を続けるにあたって所属クラブの存在がとても大きなものとなっている。このクラブは全国的に見てもとても規模の大きな障害者チームで、専門のコーチの指導が受けられ、定期的に練習できる環境が整っているため、このクラブがあるから引退せずに水泳を続けられていると思っている。

識別番号76は先天的な肢体不自由である。幼稚園・小学校・中学校・

高校と普通学校に通学、中学校の部活で卓球を始め、高校 2 年まで続けたが、体の不調などが重なり一旦卓球から離れた。一浪後、大学で卓球を再開。大学卒業後 2 年間フリーターで自由に過ごした後、市の職員に採用された。フリーターの時に障害者手帳を取得し、障害者の卓球大会に出場するようになったが、最初の大会で大敗したことに衝撃を受け、のめり込む。現在、練習や試合の多くは障害のない人と一緒に行い、障害者卓球大会にも併せて出場している。

識別番号 96 は先天的に聴覚障害がある。小学 4 年からラグビーを始め、中学校から地域のクラブで本格的にラグビーに取り組んだ。高校ではキャプテンを務め、ラグビーの強豪である大学に進学しトップレベルのラグビーに向き合い、公式戦出場を果たした。大学 4 年間はラグビーに専念し、卒業後にデフラグビーでの活動を再開、2018 年デフラグビー世界大会で日本代表キャプテンを務めた。現在はデフラグビーの普及、強化活動に取り組んでいる。

A4 に該当するのは識別番号 80、85 の 2 名である。このうち、識別番号 80 は先天的な聴覚障害がある。中学校(普通学校)ではサッカー部に入り、高校はハンドボール部に入って活動した。2025 年のデフリンピック東京開催が決定した。当時、日本はまだ一度もハンドボールでデフリンピック出場を果たしていなかった。東京開催を契機に「ハンドボール日本代表チームを結成する」機運が高まった。日本ハンドボール協会の中にデフハンドボール専門委員会が立ち上がった。識別番号 80 は大学の講義で「デフリンピック」や「デフスポーツ」を知った。日本開催のデフリンピックにハンドボールで出場するという目標ができた。その後、デフハンドボールのチーム設立に向けて動き出せる見込みが立ち、デフハンドボールプレーヤーとしての挑戦が始まった。

識別番号 85 には先天的な視覚障害がある。保育園・小学校・中学校・高校と普通学校へ通学した。小学校のころは放課後に野球をしたり、サッカーをしたり、町内のソフトボール大会に出たり、ほかの子どもたちと一緒にやっていた。小学校 5 年生の時、バルセロナオリンピックの古賀稔彦選手を見て柔道をやろうと思った。

中学校ではバレーボール部に入部した。体育館の光の関係でボールが

見にくい時はあった。体育の授業等は特に支障なく行っていた。柔道の町道場には引き続き通っていた。高校には柔道部があったので入部し、黒帯を取得した。高校卒業後視力が著しく低下した。21歳で盲学校に入学した。盲学校で柔道の専門の先生がいて何度も誘われしつこく視覚障害者柔道大会に出た。初めて出た視覚障害者の柔道大会で準優勝したが、決勝で負けて、悔しくてきちんと練習をしようと思えるようになった。2008年にはパラリンピック北京大会に出場した。30～31歳のころ柔道の一線を退き、グランドソフトボールをやっていた盲学校時代の友達に誘われてグランドソフトボールをプレーするようになった。

A5、A6

A5、A6は先天的に障害があるが、A3、A4と同様に、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツとは別のスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人で、A5は現在も最初に始めたパラスポーツを実施している人、A6はさらにその後違うパラスポーツを実施するようになり現在に至っている人である。なおA6に該当する選手は本調査においてはいなかった。

A5に該当するのは識別番号33、50、51、60、79、86、90の7名である。

このうち識別番号60は先天的に左手の手指が欠損している。5歳からラグビーを始め、器械体操、ボクシング、陸上競技、サッカー、卓球と様々なスポーツを行ってきた。それらは全てラグビーの役に立つということがその理由。大学4年生までラグビーをやっていた。大学に入ってラグビーをするために高校もラグビー部のある体育系大学の付属高校に進学。大学1年のころ、大学の障害者スポーツ専門の先生に声をかけられたのがきっかけで、アルペンスキーを本格的に始めた。高校時代にすでにスキー検定2級を取得していた。そして、大学3年の時、平昌パラリンピックで入賞、北京パラリンピックも複数種目で入賞した。大学院に進学、2023年3月修了。2021年からは選手雇用されている。

識別番号86は先天的な視覚障害。保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校・大学と普通学校に通った。小学校の時、サッカー(3日程度)、ミニ

バスケット(小学校 6 年の時 2~3 か月)をやったほかは、特にスポーツはやっていない。外で遊んだりするのは好きだった。遠近感がわかりにくいこともあり、あまり続かなかった。中学校・高校では、卓球部に入っただが遠近感がわからないことは変わりなかった。大学時代は様々なスポーツを楽しむ「スポーツ同好会」というサークルに所属した。一度就職したが、視力低下により退職し 30 歳で盲学校に通うことになった。盲学校では人数も少ないことからグランドソフトボールや柔道、陸上競技など様々な競技を経験した。盲学校卒業後、盲学校時代の先生に声をかけられグランドソフトボールを始めた。

識別番号 90 は小学校・中学校は難聴学級に在籍し、国語・数学・社会のみ難聴学級で授業を受けていたが、それ以外の科目に関しては普通学級で受講していた。小学校 5 年生からバスケットボールをしていたが、周りの音やチームメイトの音が聞こえず、自分が前に走るとボールの位置がまったく分からず、団体競技の難しさを感じていた。中学校・高校では個人競技をやりたいと考えて軟式テニス部に入部した。中学校 3 年からレギュラーに選ばれて、そこから楽しく活動することができた。ろう学校専攻科入学後、幼なじみから、「できたばかりの障害者バドミントンクラブがあるから一緒にやらないか」と声をかけられ体験した時に魅力を感じた。就職後、現在の障害者バドミントンクラブに入り、20 年以上活動を継続している。

B1、B2

B1、B2 は後天的に障害を持つようになり、パラスポーツを行うようになるが、障害を持つ前は特にスポーツは実施していなかったパターンである。B1 は最初に始めたパラスポーツを現在も実施している人で、B2 はその後違うスポーツを始め、現在に至っている人である。

B1 に該当するのは識別番号 42、83 の 2 名であった。識別番号 42 は 31 歳で視覚障害が発生している。それまで、スポーツは嫌いというわけではなかったが、特に何もしていなかった。30 歳代半ばころから地元の視覚障害者用図書館でサウンドテーブルテニス(以下、STT)を始めた。2012 年の全国障害者スポーツ大会県大会の STT に初出場し 2 位

となり、その後、同大会に 4 度出場している。現在も競技を続けながら、STT のサークルを主宰している。

識別番号 83 は 10 歳の時の事故により、右上腕欠損となった。体育の授業は小学校・中学校ともにほぼ見学。高校ではマラソンのみ参加したが、「体育はできないもの」と思っており、スポーツとは無縁の生活を送っていた。結婚・子育てが一段落した 44 歳で乗馬を始めた。47 歳から競技としてのパラ馬術の大会に出場し、2016 年日本障がい者乗馬協会(JRAD)の強化選手に選ばれ、2018(平成 30)年度東京アスリート認定選手、パラリンピック出場を目指した。2017 年より選手雇用されている。

B2 に該当するのは識別番号 95 である。識別番号 95 は 15 歳の時に黄斑ジストロフィーによる視覚障害となった。小学校の時に見えにくくなって以降、部活動等にも入っていなかった。大学で視覚障害者柔道選手と出会い 20 歳で柔道を始めた。2016 年にパラリンピック東京大会出場を目指し、東京都パラリンピック選手発掘プログラムを経てローイング選手としてトレーニングを開始、着実に力をつけ、2021 年東京パラリンピック混合舵手つきフォアに出場した。同時にクロスカントリースキー選手として、2021 ジャパンカップ札幌大会、2022 年北京パラリンピックへの出場を果たし、夏・冬両大会に出場するパラリンピアンとして、現在もトレーニングを続けている。

B3、B4

B3、B4 も後天的な障害者である。障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後に障害発生前と同じスポーツをパラスポーツとして行うようになった人で、B3 は現在も同じスポーツをしている人、B4 はその後、違うスポーツを行うようになり、現在に至っている人である。

B3 に該当するのは識別番号 2、9、18、20、35、36、53、55、71 の 9 名である。このうち識別番号 9 は 21 歳で脊髄損傷を負った。小学校低学年から父親の影響で水泳を始め、高校総体や国体にも出場した経験を持つ。障害発生後、体力回復とリハビリのために水泳を始めた。ちょうどアトランタパラリンピックが行われており、また水泳仲間からも勧めら

れ、シドニーパラリンピックを目指すことになった。現在も父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブで子どもたちに水泳指導をしつつ、自分の練習も行っている。

識別番号 18 は小学校・中学校とバスケットボール部に所属。中学校 2 年時に骨肉腫を発症し、右膝下から切断。高校時代は、女子バスケットボールのマネージャーを務める。部活動を引退した高校 3 年時に、地元の車いすバスケットボールチームに自ら連絡して練習に参加。入会后、大学に進学しながら競技を続ける。車いすバスケットボールのジュニア日本代表に選出され、世界選手権(25 歳以下)に出場した。

識別番号 20 は中学校・高校一貫の進学校の柔道部に所属、中学校 1 年時にキャプテンに任命され、そのまま 6 年間務める。高校卒業とともに柔道から一時的に離れる。浪人 1 年目に右目の緑内障を発症。右目の視力を失う。大学に合格して上京。大学 2 年時に左目の緑内障を発症。友達、家族、大学のサポートも受けながら卒業した。

当時付き合っていた人に、視覚障害者柔道を紹介されて、取り組み始めた。その後、世界選手権、北京パラリンピックに出場。2011 年に、起業する。事業も軌道に乗り、様々な団体・組織の理事をする傍ら、現在は複数の会社の代表取締役社長を務めている。

識別番号 36 は子どものころから家族でよくスキー場に出かけていた。小学校 5 年からスノーボードを始め、大学 2 年で本格的に競技をやりたいと思い、ニュージーランドのキャンプにも参加した。32 歳の時に業務中の事故により右大腿の 2 分の 1 以上欠損となった。事故で足が欠損しているのを見て、自分は義足になると思い、何ができるかと考えやはり「スノーボード」だと思った。入院中に調べていたら、ソチパラリンピックからスノーボードが種目として採用されることを知り、パラリンピックに出ようと思った。もともとプロスノーボーダーだったことと、義足のスノーボーダーの友達がいたことも影響した。

B4 に該当するのは識別番号 1、8、10、24、31、34、39、97 の 8 名である。このうち、識別番号 10 は 3 歳から 10 歳まで水泳をやっていた。13 歳の時骨肉腫により、右大腿部 2 分の 1 以上を切断した。切断してから学校の体育を含め一切スポーツをしてこなかったことから、自分に自信

が持てるものが欲しいと思い、フィットネスクラブに入会し、経験のあった水泳を自らやるようになった。通い始めたフィットネスクラブにはトライアスロンコースがあったが、当初はここで水泳だけを行っていた。当時、自分は右脚がないためトライアスロンはできないと思っていたが、海外では同じ障害でトライアスロンをやっている人が何人もいることを知り、トライアスロンにかかわるようになった。2012年のロンドンパラリンピックは水泳で出場を目指したが、かなわず、その後トライアスロンに転向した。リオデジャネイロパラリンピックにはトライアスロンで出場し入賞した。

識別番号 31 は小学校のころから運動好き。マラソン大会はいつも 1 位か 2 位。体力測定は常に 1 級だった。中学校は柔道部。顧問(担任)教師の強引な勧誘で柔道部に。3 年でキャプテン。柔道初段。高校ではペン習字クラブへ。スポーツはほとんどせず。高校卒業後、印刷会社に就職した。30 歳の時に視覚障害となった。障害者スポーツに関する情報を一所懸命探し、柔道ができるところを見つけたものの何度も断られた。以前柔道をしていた時の知り合いがその道場で指導していることが偶然分かりその人の仲介でようやく道場に通えるようになった。2000 年シドニーパラリンピック入賞。その後、自転車競技を経て陸上競技を行うようになった。現在は投てき専門の指導者に指導してもらっている。60 歳になったら投てき 5 種目で一般の大会にも出ようと思っている。105 歳までにマスターズで記録を残すことが目標である。

B5、B6

B5、B6 は後天的な障害者で、障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後は障害発生前とは違うスポーツをするようになった人で現在もそのスポーツを実施している人が B5、その後異なったスポーツを実施するようになり現在に至っている人が B6 である。

B5 の該当者は識別番号 7、14、15、17、22、23、26、27、29、30、32、37、41、64、69、70、73、93 の 18 名である。このうち識別番号 29 が最初にやったスポーツは空手、そして中学校の時はバスケットボール部だった。中学校 3 年生の時に交通事故で右大腿切断になった。切断後、半年くらいで同じ切断の陸上競技選手が会いに来てくれた。車いす

バスケットボールをやろうかと思っていたがこの選手に強く陸上競技を勧められ、陸上競技をすることにした。最初は地元の義足の人の陸上競技クラブに入り、高校 2 年からは高校の陸上競技部に入った。高校 3 年生の時から企業と契約し、プロとして活動。大学 1 年次に 2016 年リオパラリンピックに出場した。陸上は自分の体が「あ、もう無理」と思うまでやりたい。東京大会が終わって悔しい気持ちがあるのでパリこそはと思っている。それが終われば、きっとロスこそはと考えていると思うとのことであった。

識別番号 69 は小学校・中学校・高校と普通学校に通う。小学校 4 年の時に網膜色素変性症を発症し、それ以降視力、視野が低下する。体育の授業では球技はボールが自分の視野の外にあるとどう対応していいかわからず、あたふたしてしまう。そういう姿をみんなの前で見せることが精神的にきつかった。小学校 1 年から高校 3 年までは剣道をやっていて、剣道 3 段。高校卒業後、関西の調理師学校に通い調理師免許を取得。その後、中華料理店に就職したが、視覚障害が原因で退職した。退職後すぐに、国立障害者リハビリテーションセンターへ入学し、ゴールボールと出会う。2017 年、国立障害者リハビリテーションセンターを卒業と同時に現在の会社に選手雇用された。東京パラリンピックに出場した。

B6 に該当するのは識別番号 3、6、19、25、43、47、52、57、74 の 9 名である。この内、識別番号 43 は小学校を卒業するまでは野球をやっていた。中学校入学前に骨肉腫で片大腿離断。その後中学校・高校・大学と普通学校に通うが、中学校・高校の体育はほとんどが見学だった。中学校 2 年の時、親が車いすバスケットボールチームを見つけてくれ、通うようになった。その車いすバスケの練習の場に、車いすテニスの関係者が来てくれ、車いすテニスの講習を受けた。しばらく車いすテニスと車いすバスケを並行して行っていた。中学校 3 年のころから個人でできる車いすテニス一本に絞って行うようになった。高校の間は親に送り迎えしてもらっていたこともあり、テニスはほとんどやっていない。高校を卒業し、車の免許を取得し、自分で移動ができるようになってからテニスを再開した。大学 4 年の時、国内トップになり、就職 2 年目にアトランタパラリンピックに出場した。この後のパラリンピックではメダルを獲得してい

る。

識別番号 57 は子どものころから体を動かすことが好きで学校でロードレースや長距離走、水泳、クロスカントリースキーやアルペンスキーなどしていた。小学校3年ごろ、周囲が視力低下に気づいた。小学校6年の2学期から高等部までの盲学校を経て短期大学に進学。在学中の 1994 年、盲学校時代の先生からの誘いで長野パラリンピックを目指してバイアスロンを始めた。長野パラリンピックではバイアスロンでメダルを獲得している。特別養護老人ホームに就職していたが、より練習しやすい環境を求めて企業就職(選手雇用)した。現在は引退し、日本障害者スキー連盟で障害者スキーの普及活動を行っている。

識別番号 74 は中学校は柔道部、高校はラグビー部に入った。高校卒業後は家業を継ぐとともに社会人チームでラグビーを続けた。34 歳の時、バギー(車体が軽量で最低限の構造を持ち、オフロード走行など悪路走破性に優れた小型の乗り物)のレース中の事故で脊髄損傷になった。入院中に会った車いすリース会社の人から誘いを受け、車いすバスケットボールを始めた。同じ年チェアスキーを体験しこれに熱中するようになった。その後 2006 年に車いすカーリングの体験会に参加し、翌年に車いすカーリングのチームを立ち上げた。2014 年には世界選手権に出場した。また、2016 年、2022 年に国内で優勝し世界選手権に出場した。現在車いすカーリングを週に 1~2 回、トレーニングの一環として車いすバスケットボールも行っている。

(第 1 章担当:藤田紀昭)